

# 女子アナに「寿命」はない

## 下 60歳で「お肌」リポート

関純子さん(60)は昭和63年に  
カンテレに入社した。

「楽しくなければテレビじゃ  
ない」というスローガンで、フ

ジテレビがテレビの黄金期を牽  
引した時代だった。女性アナウ  
ンサーが「女子アナ」と呼ば

れ、バラエティー番組でタレン  
トを食う人気ぶりを発揮してい  
た。

フジが売り出した「花の3人  
娘」の河野景子さん、八木亜希  
子さん、有賀さつきさんは、局  
は違えど関さんと同期にあた

る。関さんも同時代を駆け抜  
け、大阪ローカルで看板をはっ  
た。

女子アナとプロスポーツ選手  
との結婚が話題をさらったのも  
このころだ。野球界では古田敦

也さんと中井美穂さん(元フ  
ジ)、イチローさんと福島弓子  
さん(元TBS)、相撲界では  
貴乃花関と河野景子さんなど数

えきれないほど。

が、メディアがつくった女子  
アナの偶像是東京のキー局限定  
のもので、関さんは「まったく  
違う別世界の話」と振り返る。

「私を含め社内結婚が多いし、  
近場で見つけて、そっと結婚し  
ている」と笑う。

社会問題にまで発展したフジ  
テレビのセクハラ問題では、報  
じられた事例について「想像す  
らできない、よくわからない話  
ばかり。『Me too(私  
も)』と共感できるものはまっ  
たくなかった」と冷めた反応を  
見せる。

女子アナの「寿命」は短いと  
される。定年まで続ける人は珍  
しい。関さんの1期上の先輩は  
40歳で宣伝部に、同期も41歳で  
人事部に、10期下の後輩は一昨  
年、事業部に異動した。辞めた  
人も数人いる。関さんは毎年行

われる人事の希望調査で「アナ  
ウンサー続行」で提出してい  
た。

読むのが主な仕事。深夜最後の  
ニュースが終われば午前4時半  
ごろまで仮眠がとれるが、災害  
などの緊急ニュースに備えて化  
粧は落とせない。どこか緊張し  
ていて「何も起こりませんよう  
に」と祈ったものだ。

元毎日放送プロデューサーで  
同志社女子大学メディア創造学  
科教授の影山貴彦さんはコラム  
で関さんをこう評価している。

「頭の回転の速さをひけらか  
すことなく、出演者・スタッフ  
たちへさりげない気配りを忘れ  
ない。びっくりするような天然  
ボケをかまして場をなごませ  
る。ボケは天然ではなく、緻密  
な計算がなされた高度な『芸』  
なのかもしれない」(WEBメ  
ディア「ウォーカープラス」令  
和2年10月21日)

関さんは40代、50代では宿直  
勤務を頑張った。

毎日、誰かがやらなければ回  
らない業務。とはいえ男女を問  
わず、子育てや介護などをこな  
しつつ働く時代だから、シフト  
に入れる者が担うのが当然と受  
け止めている。

夜間、早朝の定時ニュースを



箕面まつりで「よさこい踊り」を披露する関さん。趣味で地元のチームに入り踊っている—平成24年7月、大阪府箕面市(本人提供)

視聴者も高齢化し、年齢層に  
応じた番組作りが求められてい  
る。健康、年金・保険、終活な  
どのテーマに共感でき、自分事  
として語るアナウンサーが好ま  
れるのではないだろうか。

「活躍の場所はあるはずで  
す」

カンテレの社屋を背景にポーズをとる関さん  
—大阪市北区(山田耕一撮影)